

月刊『WILL』

編集人 花田紀凱 様

発行人 鈴木隆一 様

## 貴誌 2009 年 9 月号に掲載された記事における悪質な捏造と 中傷に対する抗議と訂正の申し入れ

醍醐 聰

(元 NHK 受信料支払い停止運動の会・共同代表)

(現 NHK を監視・激励する視聴者コミュニティ・共同代表)

貴誌『WILL』の2009年9月号にNHK・中堅番組ディレクター名の「NHKがドラマ『昭和天皇 裕仁』を」と題する記事が掲載されています。その中で、2007年2月3日に開かれたNHK「ワーキング・プア ふれあいミーティング」に私が参加した件が取り上げられ、その場で私がNHKから「下にも置かぬ扱いでもてなし」を受け、懐柔されたことにより、旧「NHK 受信料支払い停止運動の会」は支払い再開に踏み切ったという趣旨の記述がされています。

このような記述は、事実の捏造によって私ならびに私が共同代表を務めた旧「NHK 受信料支払い停止運動の会」を誹謗・中傷するものであり、この記事の筆者ならびにこの記事を裏付け取材のないまま掲載した貴殿らに以下のとおり、嚴重に抗議するとともに、謝罪と該当箇所の訂正を求めます。

〔1〕記事は、NHKが私を「ワーキング・プア ふれあいミーティング」に呼ぶことにしたと記していますが、事実はNHKの参加者募集に私が応募し、参加が決まったものです。これをNHKが特別な計らいで私を参加させたかのように印象付けるのは悪質な作為にほかなりません。

〔2〕記事は、私が「ワーキング・プア ふれあいミーティング」に参加した折、NHKから「下にも置かぬ扱いでもてなし」を受けたと記していますが、これも荒唐無稽な作り話です。当日、私がNHK関係者と接触したのは「ふれあいミーティング」終了後、約10分程度です。それも出席していた番組制作担当者、視聴者センタ - 職員とこの日の討論の感想を交わしたに過ぎません。なお、「ふれあいミーティング」終了後、あちこちで同じよう出席したNHK職員と言葉を交わす参加者がいました。このような状況を、「下にも置かぬもてなし」などと描くのは笑い話では済まされない悪質な捏造であり、厳正な謝罪を求めます。

〔3〕記事の中では、私がNHKスペシャル「ワーキング・プア」(2006年7月、12月に放送)の番組そのもの、およびこの番組を題材にした「ふれあいミーティング」に参加してNHKから「下

にも置かぬ扱いでもてなし」を受けたことに感激し、「舞い上がった」かのような書きぶりをして

います。

まず、この番組自体についていえば、個人の努力ではどうにもならない「ワーキング・プア」が若年世代から高齢世代にまで広く及んでいる現実を豊富な取材で裏付け、そうした現実を社会に向かってリアルに突き付けた功績を私は今も高く評価しています。しかし、働く貧困層の問題がこれで尽きると考えたことはありません。「ふれあいミーティング」の中でも、番組の功績を高く評価しながらも、「貧困の原因にまで迫ってほしい」、「今の政治の問題にぶつかるとしてもひるまず伝えてほしい」、「解決の道筋にも触れてほしい」といった発言が相次ぎました。これに対して、出席した番組制作スタッフからは、「NHKは政府批判をするつもりはない」、「評論よりも多くの人が知らない現実をあぶりだしていくことを心がけたい」という発言がありました。

私も過剰な主張ではなく、事実に語らせる、その解釈は視聴者の判断に委ねるというスタイルに共鳴しています。しかし、重要なことは、「事実」か「評論・主張」かではなく、どのような「事実」をクローズアップするのかということだと考えており、「ふれあいミーティング」の折には生活保護行政を引き合いに出して、「現代日本の貧困の多くは行政被害と呼べるものである。この点で、ワーキング・プアの原因と考えられる現実にタブーなく迫ってほしい」と発言しました。

このような私の発言を知ってか知らずか、私がNHKスペシャル「ワーキング・プア」を見て感激し、手放しに絶賛したとか、拳句はそれを機に私ならびに私が共同代表を務めた旧「NHK受信料支払い停止運動の会」がNHKに対する態度を一変させたかのように描くのは悪質な粉飾にほかなりません。

〔４〕記事は私が上記の「ふれあいミーティング」に参加し、NHKから特別な「もてなし」を受けたのを機に旧「NHK受信料支払い停止運動の会」が受信料の支払い停止を解除したというストーリーを描いています。こうしたストーリーが荒唐無稽の作り話であることはこれまで説明してきた事実経過から明らかですが、詳しくは、「NHKを監視・激励する視聴者コミュニティ」名で貴殿に提出する別紙の文書に譲ることにします。

最後に。当該記事を貴誌に掲載するのであれば、当事者である私に取材をして事実経過を確かめるのが雑誌編集の常道です。にもかかわらず、今回、貴誌はそうした取材を一切省き、上記のような粉飾と捏造を随所にちりばめた記事を一方的に掲載しました。こうした雑誌編集の手法は断じて許されないことを申し添えます。

以 上